MTMJ（エムティエムジェイ）

日本らしさと茶道

目次

Sample

日本語版へのまえがき……v
まえがき……ix

序章　ネーション・ワーク――ネーションの社会学的分析……1
ナショナリズムとネーションネス……2　研究の分断をつなぐ……6
ネーションとカテゴリー化……10　茶道の研究状況……14　本書の展望……20

第一章　茶を点てる――空間・物・行為……25
日本の中の日本らしさ……27　茶室……29　道具……48　点前……57　まとめ……73

第二章　茶を創る――文化慣習の国民化……77
茶道の起源……79　パワー・ポリティクス……83　江戸時代の茶道……89
近代日本の茶道Ⅰ――数寄者……93　近代日本の茶道Ⅱ――女性……97
近代日本の茶道Ⅲ――知識人……106　まとめ……116

第三章　茶を営む――家元制度の解剖……121
家元の起源……123　技術――点前に対する権威の拡大……125
好みと価値――道具に対する権威の拡大……128　家元制度の強化……130
上層階級の茶道と家元の限界……131　新たな支配領域……133
国家のツールから国民のツールへ……136　イデオロギーの強化……139
経済的基盤の拡張……145　家元の社会的地位の上昇……155　まとめ……158

第四章　茶を行う――日本らしさの実践と実演……161
家系に生きる家元……163　家元の権威の輪郭……178　茶人……183　稽古……188　実演……199
作文……210　まとめ……215

第五章　茶室を越えて――文化ナショナリズムの人間行動学をめざして……217
拡散する茶道……219　茶道の印象……232　国民的なるものとナショナリズムの人間行動学へ……236

原注……261
監訳者あとがき――本書をお読みいただくにあたって（廣田吉崇）……323
参考文献……353
索引……359

◆凡例

本書は、Kristin SURAK の *Making Tea, Making Japan : Cultural Nationalism in Practice*, 2013 を日本語に翻訳したものである。原著にふくまれている歴史的事実の明白なあやまり、日本語文献の誤読等については、著者に了解を得て修正した。また日本語として理解しやすいように訳文を工夫した部分もある。しかしながら日本の読者には違和感のある内容、あるいは明らかにあやまりと考えられる内容をふくんでいるとしても、著者自身が体験等を通して到達した認識であることにかんがみ、基本的に手をくわえずにそのまま訳出した。

著者が原著において日本語文献から引用した部分は、可能なかぎり元の文献からの引用によることにした。ただし引用の形で示されている口頭またはビデオテープ中の発言は原著からの翻訳によっている。なお、引用にあたり現行通用の字体に改めた。

文献の表示は、本文中では副題までをふくむ表題を記載した。ただし原注および索引においては副題を省略した。

訳注は本文および原注に〔　〕書きにして記載した。

日本語版へのまえがき

茶道における大きな楽しみの一つに、新たな人と知り合えることがある。このような「出会い」は、一瞬のことであっても長らくつづく場合であっても、ときに素晴らしい結果をもたらしてくれる。三年前の茶の湯文化学会大会において廣田吉崇氏と知り合えたのもそうした出会いであった。私たちはごく短時間しか話をしなかったが、長い年月のうちに形成された茶道の制度的構造に対する関心を共有していることにすぐ気がついた。しかしこの偶然の出会いは、たいへん意義深いものへと変化した。廣田氏が私の著書の翻訳を提案し、京都造形芸術大学の井上治氏および黒河星子氏とともに自ら翻訳作業にとり組むことを申し出てくれたのである。

この三人のチームのたゆまぬ努力の結果、本書の刊行が実現したことに私はたいへん感謝している。本書の日本語の文章を抵抗なく自然に読むことができるならば、茶会の亭主がよどみなく点前をするように、表だっては見えないが、自発的な献身による膨大な努力が裏に隠されているのである。

多くの時間をかけて言葉と向き合い、考えうる訳文を検討し、意味をさまざまな角度から確認しながら、チームは困難な仕事をおこなった。英語版のＭＴＭＪは、何といっても社会学の研究書であり、社会学の専門用語と難解な理論に満ちている。それを分析の趣旨を損なうことなく、学問の世界以外の人々にも受け入れられるような文章にしなければならなかった。また本書は翻訳の中にさらに翻訳をふくんでいる。というのも原著の日本語、フランス語、ドイツ語、およびその他の言語はすべて英訳されているためである。翻訳文の作成のために、それぞれの原文を確認したり、標準的な訳文をさがしたりして、翻訳者は図書館に足繁く通わなければならなかった。そして細心の努力の結果、原著の内容に改善がもたらされたこともある。

そしてまた本書の主要な部分は、日本の日常生活において当然のこととされるようなありふれた行動であり、文字通り無意識のうちにおこなわれるような事柄である。言葉で説明されないこれらの行為については、わかりきったことを使い古された表現であらわすだけに終わらないような語句の選択が必要とされた。このような観察は、外国人の読者に何らかの新鮮なものを与えてくれる新しい世界を紹介する。しかし日本人の読者にとっては、原著の一般的な議論について注意深く翻訳がなされていないならば、釈迦に説法のような無意味な結果になる恐れがある。

最後に本書の関心の中心は、「日本文化」がどのように機能しているのかを調べることである。しばしば茶道の文脈において見なされたり、主張されたりするように、結果を説明する不変の事実（説明文）として日本文化をあつかうことは本書ではしていない。むしろ「日本文化」自体を説明の対象（説明内容）としている。そして分析により、歴史における偶然の社会的構築物としての「日本文化」の創造につながる仕組み――機能――を明らかにした。しかし翻訳者は、茶道が日本的であるという一般的な前提を無批判にもち込まないように絶えず注意を払わなければならなかった。

当然のことながら、茶道は単なる日本の象徴として矮小化することができないし、それよりもはるかに大きな存在である。そして茶室の中で起こっていることの多くは、それ自体日本らしさとは関係ないことである。このため本書は、この複雑かつ、長らく存続してきた茶道という実践の、すべての表象を総合的に分析することをめざしてはいない。むしろある一つの、日本らしさと推定される側面を社会学的に探究することにより、当然視されることを維持する過程および労力を明らかにすることをめざしている。この茶道の分析は、日本をはるかに超え、他の地域で見られる、より広い社会過程を明らかにする手段になりうる。このような理由から、私はあまりによくある茶道と花道や武道の比較をあえておこなわず、私が茶道の文脈から掘り起こした諸現象が、ヨーロッパのオペラやインドの体操などの懸け隔てられた実践や場所においてどのように見られるのかを探究した。普通おこなわれないこの対比は、まったく異なるものの間の予期せぬ関係を露呈し、それを支えているより一般的な

社会的機能を明らかにする。このような分析は社会学の大きな楽しみの一つであり、ありふれたものを異質なもの、異質なものをありふれたものとして、それらの間で共有されている基本的な何かを明らかにしてくれる。

人が著書を出版するとき、その本は著者から離れて、それ自身の生命を獲得し、さまざまな形で読まれることになる。私は日本語に生まれかわった本書の生命が、とりわけ茶道のような深遠な実践について社会学的に考えることの楽しみを伝えられるように願っている。

二〇一七年一二月

イギリスのケンブリッジにて
クリステン・スーラック

まえがき

茶道と日本らしさの関係を論じる本書のきっかけになったのは、学術的でありながらも個人的なできごとであった。一九九九年のことである。外国人へ「日本文化」を広めることに熱心な日本人は少なくないが、その一人である友人は、自分の茶道教室に私を招いてくれたのである。「日本文化」にふれてみたい外国人も少なくないが、その一人である私は、茶道教室に行ってみることにした。お弟子さんが抹茶を点てるのを見学した後、私はその複雑な点前をしてみることになった。その日の記憶はうすらぎつつあるものの、「左手、右手、ちがう。右手」と教えられながら、茶碗のもち上げ方すらわからないほどに混乱したことは今でもはっきりと覚えている。それから私は、毎週茶道教室に通うことになったのである。

私にとって茶道教室は、〝本物の〟日本文化という魅惑的なイメージを満たす以上に、より広い日本社会への入口になった。当時私は日本のある島で一年ほど英語を教えていた。しかし日本語がよく話せなかったので、時間があるときは近隣の外国人と一緒に過ごすことが多かった。ところが毎週茶道

教室に通うようになって、私は地元の日本人の家庭を訪れ、地元に日本人の知り合いができ、そして何よりも日本語を学ぶことができた。私はお世辞を真に受けずにうまく聞き流す術や、場の雰囲気に応じた言葉づかい、そして他人にお礼をいったり、頼みごとをしたりする微妙な表現を覚えた。日本語が上達するにしたがい、知り合いは友人となり、私は周囲との関係に自信がもてるようになった。

多くの茶人が体験するのと同じく、茶道の稽古における点前と対人関係によって、外国人である私の身体は典型的な日本人の鋳型にはめ込まれた。外国人は異質な存在であり、日本のことがわからないと考えられている。新たに日本へやってきた外国人は、日本人同士のつきあいになじみのない習慣をもちこむものと思われている。そのあつれきによって日本人は、一般に当たり前と思っていたことを改めて意識させられる。この場ちがいな感じや奇妙な感じ、あるいは疎外感や不安感は、〝違和感〟という言葉でいいあらわされる。しかし茶道を長く習っているうちに、私は「あなたには違和感がないですね。動きが自然だ」といわれるようになった。着物を着ているときの所作もほめられた。「あなたは後ろから見るとまったく日本人に見える。まっすぐ立ったり座ったりするのが自然だ」とか、「ほんとに日本人みたい。後ろから見たらまったく外国人には見えない」といわれた。茶人とともに長時間熱心に稽古したため、上半身の動きを身につけることができた。礼の仕方、両手のしぐさなどの控えめな表現は、日本では身体に染み込んでいる当然のふるまいである。すっかり気を許した人は、私が外国人であることを忘れて、西洋人や来日者への不満を口にした。そしてはっと我にかえって「あ、あなたがアメリカ人ってことを忘れていたわ」と気まずそうに笑うのである。日本化した私の身体からは外国人らしさが消え、外国人を意識させなくなったのである。[1]

しかし私は日本人ではない。外国人、とくに白人の西洋人は、日本では特別あつかいされることが多い。私の研究は、外国人に自国の文化を広めたいという日本人がもつ関心に助けられた。外国からのお客さんをもてなしたい茶道の師匠から夕食を、さらには泊まっていくようにとたびたび勧められた。茶室以外にもふれあう機会があり、私は日本人の生活における茶道の役割をよく理解することができた。[2] 他流派の茶会に参加するにも師匠の許しが必要で、転居や止むを得ない事情がないかぎり一生同じ師匠につくことが当然とされる茶道の世界において、外国人であり、かつ研究者である私は、比較的自由でいることができた。私は美術館の茶道具展に案内されたり、さまざまな茶会、さらには一般人がとても入られないような格式の高い茶会に連れられていったりした。

ところが月日が経つにつれて私の特別あつかいも色あせ、茶道の稽古に長らく通った茶道教室では、私も他の弟子と同じ期待と義務を担うことになった。若い女性に対してはとくに厳しく、ある情報提供者(インフォーマント)が嘆いたように「とにかく言われたとおりにしなさい。あなたは何も知らないのだから。口答えはしないの」というような茶道の世界の上下関係は、ときに耐えがたいものがある。このような話を聞いて同情していたが、結局私も自分自身のこととして実感する羽目になった。稽古の場ではいっしょうけんめい努力しているにもかかわらず、私もまた〝あやまち〟を叱られるようになった。茶事の役割を学ぶ稽古がおわり、師匠は何か気づいたことがないかと尋ねた。私は正客の役をしていた。その茶事のために亭主が選んだ茶道具を尋ねるのは正客の役割である。私は有名な職人がつくった仕

覆について聞くのを忘れましたと告白した。失敗には気づいていた。茶事では道具についての厳格な問答の手順があり、そのとおりに尋ねたにもかかわらず、亭主が仕覆について説明しなかったのである。しかし弁解は許されなかった。だまって座っている私に対し、師匠は今までの稽古で何を習ってきたのかといいながら、私の不作法と無神経さを叱った。古風な師匠がよくする、情け容赦ない叱り方である。そのうちに言葉の壁を大目に見てもらえることもなくなった。師匠が正式の茶会を催す際には、他の弟子と同様に私も、流れるような文字で会記に書かれた道具や職人のわかりにくい名前を正しく読んで覚えて長々と説明することが求められた。そして間違えると厳しく叱られた。残念なことに私も他の弟子と同じようにあつかわれたのである。

だいたい日本人は大げさに人をほめることで有名である。明らかな外国人が“thank you”のつもりでちょっと「アリガトウゴザイマス」と口にしただけで、流暢な日本語を完璧に話すとほめられるのである。外国人である私も、額面どおりに受けとってはならないこの手の誠意あふれるお世辞の分け前にあずかった。しかし経験によって感性が磨かれ、それがありきたりの社交辞令なのか、あるいはいつわりのない驚きや深い感銘なのかがわかるようになった。茶人はよく茶道について外国人向けの紋切り型の説明をする。経験を積めばこれはすぐに見抜くことができるし、くり返し聞かされる内容それ自体が社会学的に分析する材料になった。ときにこのような紋切り型の説明から真摯な議論へと発展したこともあった。このような場合、輝かしい理想の裏には厳しい現実があることをよくわきまえている茶人として、私は「あなたならわかるでしょう」といってもらえるようになった。

私は外国人であるとともに茶人であった。この二つの立場のバランスは、状況によって変化した。外国人であるために、私の茶道のネットワークは、たいていの日本人よりも多彩であった。知り合いになった人も私に茶道への関心があるとわかると、すぐに熱心な文化大使になった。かならずといっていいほど、日本で何をしているのかと聞かれたので、バスの中での見知らぬ人との会話をきっかけに茶会に招かれることもあった。知り合いのおじさんがある流派の家元と高校の同窓であったとか、友人の友人が私を地元の茶会に連れて行ってくれるだろうとかの話をした。さまざまな茶道流派の人と知り合いになるにつれて、茶道の世界が広がるように特色のある茶人や著名な茶人を紹介してほしいと頼んだ。日本人と外国人の間にある壁をとり払うには、個人的な紹介が欠かせない。事前に説明がしてあれば、核心にふれる会話が可能になるからである。

時間と情報が積みかさなるにつれて、状況に変化が生じてきた。私は単なる外国人ではなく、外国人研究者、外国人茶人、さらには外国人ですらなくなり、単に研究者、茶人とみなされるようになった。私自身教授資格をとるまで十年間茶道を稽古したこともその要因であった。どこの稽古場でも舞台裏の水屋仕事を手伝った。そこには茶室での緊張感（あるいは外国人研究者の訪問という緊張感）は存在せず、ふだんの会話や愚痴を聞くことができた。茶碗を洗うことは、点前を見ることと同じくらい情報収集に役立った。大規模な茶会では猫の手も借りたいくらいなので、私もできるだけ手伝った。一息ついておしゃべりの時間になると、私は茶道の研究をしていると伝えて、経験談を聞かせてもらった。私は茶室でも水屋でも頼りになる助っ人の外国人茶人として認められた。

十年間も茶道の稽古をしていると、茶人同士が道具、職人、あるいは宗匠のことについて内輪話をしていても聞いて理解できるようになった。しかしより重要なことは、茶道の世界の秩序と束縛の中で茶人がいかに行動し対応しているのかを知ることができたことである。釜を前に松籟を聴いて過ごした年月は伊達ではない。本物のほめことばか、皮肉や嫌味をふくんでいるのかを聞きわけ、間違いがあっても見て見ぬふりをされることも知った。そして時間はかかったものの、抹茶を点てるという具体的な行為について十分理解できたのである。本書においてはこのことを重点的にえがき出している。

しかしながらいかに私が日本人らしく自然にふるまうことができても、いかに茶道の専門的知識や技術を身につけても、私は日本においてフィールドワークをしている外国人であることにかわりはない。収集・作成したデータへの影響を考慮したとしても、このような私の属性は役に立ちこそすれ、研究の障害にはならなかった。外国人である私の存在そのものが茶道の世界における日本らしさを強調することになるので、私はほとんど、もしくはまったく自分が関与していない機会を利用した。日本人による日本人のための茶道のデモンストレーション、日本人のために日本語で書かれた茶道関連の本、日本人のために日本語で制作されたテレビ番組などである。一般にこのような場面では、はっきりと日本らしさが語られるので、茶道と国民的（ナショナル）アイデンティティの関係を研究するために豊かな資料を提供しているのである。

情報収集

結果的に本書は、日本において数年間かけておこなった歴史学的・民族誌的調査に依拠している。この調査は茶道に入門してから開始したものである。フィールドワークの大部分は、二〇〇六年八月から二〇〇八年二月までに実施し、その前の二〇〇二年、二〇〇三年および二〇〇五年の夏の調査旅行において収集した聞き取りにより補完している。地域差をたしかめるため、民族誌的調査やインタビューでは三つの地域をとりあげた。代表的な大都市の東京、いにしえの都の京都、そして農村地域の淡路島である。また日本海側の新潟と東北地方の青森へも小規模な調査旅行を実施した。

民族誌的調査は、多面的に茶道の世界をえがき出すことからはじめた。私が一年以上在籍した四か所の茶道教室が調査の拠点になった。さらに毎回ではないが私が何度か訪れた他の四か所の茶道教室も参考にした。ときには複数の弟子との非公式な会話を録音し、二か所では録画もした。この他に一度だけ訪れた公民館、ホテル、個人宅、いくつかの流派の家元本部など一〇か所があった。高校や大学の茶道部が主催する茶会、中学校の茶道の行事などにも参加した。公共の場における茶道のデモンストレーションもまた民族誌的調査の対象である。地方自治体が開催する地域住民向けの茶会、日本人や外国人の旅行者のためにホテルや寺院で行われる茶道のイベント、あるいは生誕記念や追悼行事として寺院でおこなわれる追善茶会などに、参加者として、あるいは関係者として何度も参加した。ある流派の全国組織のメンバーになった私は、その会議や研修会に参加して、茶道の組織を内側から知

ることができた。多くの茶人が予定表に印をつけて心待ちにしている、少人数の本格的な茶事や大規模な大寄せ茶会にも参加したり手伝いに行ったりした。私の調査の大部分は、大多数の茶人が属する裏千家流によっている。しかし表千家流、武者小路千家流、江戸千家流、大日本茶道学会、石州流をふくむ各流派の稽古や茶会にも参加し、関係者と話をした。[3]

このような民族誌的調査にくわえて、一〇〇名以上の茶人に半構造的インタビュー調査を実施した。流派の家元、茶の生産者、和菓子屋、美術館の学芸員などの茶道産業とそれに関連する仕事についている人だけでなく、主婦や学生、警察官、教師、会社員、不動産業者、僧侶、芸妓、そして金と時間に困らない人である。対象者は一〇代後半から九〇代前半までの年齢で、男性も三〇名以上ふくまれる。また茶道に関係するさまざまな背景をもつ五〇名へのインタビュー調査を非公式におこなった。最後に茶人でない人と茶道の関係を見るために、茶道の世界に直接かかわっていない数十名にも調査した。バーテンダー、美容師、タクシー運転手、そして何人かの地元のバーの常連客である。

歴史学的調査は京都の茶道資料館でおこない、茶道の定期刊行物から情報を集めた。東京の国立国会図書館では礼儀作法の教本に茶道がどのようにえがかれているのかを調べた。また東京の教科書図書館や東京女子大学図書館では、二〇世紀の学校教科書や婦人雑誌などの資料を入手した。

謝辞

以上の過程において、私は研究者や友人から多くの支援をいただいた。ロジャース・ブルベイカーには研究の当初から必要不可欠な指導を受けた。そのするどい洞察力と批評のおかげで、私が想像していた以上に素晴らしい研究になった。慧眼ながら温厚なアンドレアス・ウィマーからは重要な示唆を得た。モーガン・ピテルカは作成途中の原稿を再々読んでは私を励ましてくれた。クリスティン・グースとジョシュア・モストウは草稿全体に目を通して詳細な指摘をしてくれた。エイドリアン・フアヴェル、デービッド・フィッツジェラルド、ナーズゴール・ガンドノーシュ、ウェズレー・ハイアーズ、アンジェラ・ジャミソン、ロブ・ジャンセン、ジャック・カッツ、キム・ジェウン、ジャスティン・リー、ヘルマン・オームス、イド・タヴォリ、ＵＣＬＡの比較社会分析セミナーの参加者、ロンドン大学東洋アフリカ研究学院の日本研究センターのメンバーなど、アメリカおよびイギリスの研究者からも学術的または精神的な支援を得た。またこの調査を遂行するにあたって、小林善帆、佐藤健二、佐藤成基、田中秀隆、谷村玲子、上野千鶴子、吉野耕作などの日本の研究者による学術上の支援も重要であった。

日本の友人は、いつも茶道の世界にもどることに喜びを感じさせてくれた。新垣かえことその家族、国田朱子、前島晃代、西岡一家、高橋愛子、紀田一家、豊田麻帆、内田佳助、そしてバー「ペチコート・レーン」の常連客にはとくに感謝したい。ジュリア・アンドリゲット、ケヤ・バッグ、ジョディ・

ブルムシュタイン、ソン・チョイ、テオ・クリストフ、ニック・エリオット、デイヴィッド・コウッセン、アレックス・マルティアス、イレーネ・パダビッチ、ラージ・パンディ、フェデリコ・ロッサーノ、バーバラ・シュメンク、ヤセミン・ソイサル、サラ・ティーズリーそしてミシェル・チェルニといった、日本以外の友人もつねに応援してくれた。そして、私の家族であるジョン、ジュディそしてサラには、何年にもわたる協力に感謝したい。

私の調査は、フルブライト・ヘイズ・プログラム、国際交流基金、テラサキ日本研究センター、笹川平和財団およびＵＣＬＡ大学院からの、多額の助成金と研究奨学金を受けている。本書は、私がセインズベリー日本芸術研究所のロバート・アンド・リサ・セインズベリー・フェロー、および欧州大学院のマックス・ウェーバー・フェローを得ていた時期に、ロンドンおよびフィレンツェにおいて執筆したものである。

多くの茶人と茶道の師匠、そして友人が、私を受け入れ、私と話をすることに時間を費やし、日々をともにする厚意がなければ、この研究は実現しなかったのである。社会学の研究倫理の観点から、許可を得ずに全員の名前を記すことはできなかったが、その受けた恩義にかわりはない。改めて名前をあげて感謝したいのは、私にはじめて〝茶道のこころ〟を示し、この道に進ませてくれた若竹富士子、そしてその母親であり、淡路の方言と着物の仕立てを教えてくれた若竹美代子、自然な日常生活の中に日本の伝統を残すことに尽力している太田達と濱崎加奈子、快く私を迎え入れ、また大西洋の両岸の多くの人を紹介してくれた安部とも子、長年私に正しく茶道を教えてくれた師匠の井上清子である。

これらの人と、その他の人も〝茶道のこころ〟のすぐれた模範であった。みなさんのやさしさに「オカゲサマデ」と感謝の気持ちをあらわしたい。

監訳者あとがき——本書をお読みいただくにあたって

廣田　吉崇

本書は、*Making Tea, Making Japan: Cultural Nationalism in Practice*（Stanford University Press, 2013）を日本語に翻訳したものです。著者であるクリステン・スーラック博士は、現在ロンドン大学東洋アフリカ研究学院（SOAS）法律学・社会科学部、政治学・国際総合学科の准教授の職にある社会学者です。ナショナリズム、国際人口移動などがご専門ですが、最近では日本の政治についても研究領域を広げて活躍されています。原著は著者の学位論文を刊行したものであり、二〇一四年のアメリカ社会学会アジア部門出版賞を受賞しました。その意味では本書は学術的にかなり高度な内容の難解な本であるといえます。

本書に対して、文化ナショナリズムに関する社会学的な研究成果を期待されて手にとられた方もいらっしゃるでしょう。しかし社会学徒ではない私が翻訳にあたった理由は、原著が日本の〝茶道〟を分析対象としている点にあります。外国人がどのように茶道を評価しているのか、ここに関心がある

Sample

方も少なくないと思います。社会学の最先端の議論よりも、第一章からの茶道に関する記述を中心にお目通しいただくことも本書の一つの読み方でしょうし、それが私の期待しているところでもあります。

監訳者として何度か通読いたしましたが、原著はいかにも難解でありました。原著の洗練された文章は、同語反復を避け、陰に陽に社会学的な言葉遣いをふくみ、くわえて修辞的な技巧が凝らされています。本書では「茶道」とか「家元」とか訳しておりますが、原語は一通りではありません。日本の読者に理解しやすくするため、著者に断って訳文を工夫した部分もあります。注記にある日本語文献の引用部分、参照部分はすべて原典にあたって確認しました。日本語文献のあつかいについても場合により著者の了解を得た上で修正等をおこないました。これらの作業のため、予想以上に膨大な時間を費やしてしまいました。

訳語について少し申し上げておきます。本書の主要なテーマといえる“nation”の語を、その派生語たる“national”“nationhood”“nationness”をふくめてどのように訳すべきかは悩ましいことでした。著者の主張する「ネーション・ワーク」はそのままカタカナ書きにしましたが、序章では「ネーション」をやや多く用い、その後の各章ではおおむね「国民」や「国家」などの日本語におきかえました。また本書の分析対象である「茶道をしている人」や「茶道の先生」は、「茶人」および「師匠」と訳しました。一般的には「師匠」はまだしも、「茶人」という呼称には抵抗があるでしょう。『広辞苑』によ

れば「茶人」の第一義は「茶の湯を好む人。茶道に通じた人」ですが、第二義には「変わったことを好む人。一風かわった物好き」とあります。この第二義は茶道がかぎられた人に愛好されていた近世の名残といえますが、この意識がいまだに「茶人」という言葉にまとわりついています。分析対象を客観的に示すため、あえて「茶人」に統一いたしました。

実のところ、自由に英語を読めない私が無謀にも原著を翻訳しようとした理由は、私とほぼ同じ時期に同じようなことを考えた人がいたことに感銘を覚えたからです。しかしある程度読み進めますと、その茶道理解にはいくつか疑問も感じております。私事ながら、ややさかのぼって著者との出会いから申し述べます。

著者にはじめてお会いしたのは、二〇〇七年九月二九日の茶の湯文化学会東京例会の場でした。といっても著者にはご記憶がないようです。たしか田中秀隆氏につれられて会場においでになったように記憶しております。いま調べてみますと、本書第四章の中学校での茶道の実演のことを「茶道と日本らしさと性別」という表題で発表されています。当時の私は、県庁での勤務をつづけながら、その年の四月から年次有給休暇をつかって神戸大学大学院に通学しはじめたところでした。私は流派による点前のちがいを研究テーマにしていましたので、著者の発表にはあまり関心をもちませんでした。しかしその後、私は博士論文のテーマを「近現代における茶の湯家元の研究」に変更し、その学位論文を二〇一二年に上梓しました（以下拙著といいます）。このため私は家元に関する研究者と見なされるよう

になりました。著者と再会しましたのは、二〇一四年六月一五日の茶の湯文化学会大会のことです。家元の研究者と話したいとのご希望でお会いしました。原著については岡本浩一先生の書評が二〇一三年の『茶の湯文化学』第二〇号に掲載されていましたので、多少の予備知識はありましたものの、ご著書が翻訳されればよろしいですねなどと、月並な話をしました。

私の心境に微妙な変化が生じた契機は、国際交流基金の『をちこちMagazine』二〇一四年八月号に掲載された著者の「お茶の専門家から文化の専門家へ――家元制度の成立」の講演録をたまたま目にしたことです（www.wochikochi.jp/relayessay/2014/08/iemoto-system.php）。私が拙著において〝貴紳の茶の湯〟と〝流儀の茶の湯〟という表現を用いて論じたことと同趣旨のことが書いてあることに驚きました。ちょうどその頃は二〇年がかりの仕事であった流派による点前のちがいを『お点前の研究――茶の湯44流派の比較と分析』にまとめて出版する最終段階にありました。ようやく肩の荷を下ろす目処がついた私の気持ちの隙間に〝翻訳〟という仕事がするすると入り込んできたわけです。

ただし私自身が直接翻訳することはできませんので、京都造形芸術大学の井上治先生にご相談しました。そして井上先生から黒河星子先生をご紹介いただきました。翻訳の役割分担としては、井上先生がまえがきから第二章まで、黒河先生が第三章から第五章まで訳出し、私が全体の茶道関係の部分を検討し、日本語文献を確認して、引用箇所にはめ込む作業をいたしました。翻訳という作業がこれほどたいへんとは思っていませんでしたので、私生活のかなりの時間をつぎ込む羽目になってしまいました。

翻訳者は本来黒子に徹するものであり、ここで本書について批評することは差し控えるべきでしょう。しかし原著が難解である上に、日本における通説的理解とやや異なる面があります。注記が少ないためにそれがいかなる根拠に基づいているのかがわかりませんし、歴史的な認識についても一部に著者独自の理解があるように思えます。そこでやや詳しい訳注として、何点か内容に関することにふれておきます。

私自身は石州流の一派である鎮信流を学んでいましたので、一通りの茶道の知識はあるものの、裏千家流の実技や組織運営にはかならずしも精通しておりません。そこで本書の訳文の検討にあたり、訳出された内容が裏千家流として妥当なのかどうか確認する必要がありました。何人かの裏千家流の経験豊かな方にお尋ねしまして、いくつかの疑問点は解消しましたが、そのようなことはないと否定された部分もあります。七事式と許状システムの議論にも違和感があります。おそらく読者もおかしいと感じられる部分があることでしょう。しかし著者の主張の根拠となっていますので、そのまま訳出しております。

石州流の立場からは、著者が現代の石州流について論じている部分にやや誤解があると感じます。とくに近代にいたっても「大名茶道」が影響力をもちつづけたという議論は否定的に考えざるを得ません。近世の大名にせよ、近代の数寄者にせよ、家元制度のヒエラルキーを超越した存在であるといえます。私が拙著において〝貴紳の茶の湯〟として論じたのは、〝流派〟ではなく、茶道に関する〝意

識〟の問題です。近代の数寄者は大名茶道の〝感覚〟を受け継ぎましたが、大名茶道の流派が近代になっても確固たる存在感を示したわけではありません。

素朴な感情を申し述べますと、本書を貫く〝文化ナショナリズムとしての茶道〟という議論に対して、茶道の実技を楽しみとしている私は、論理的には理解しつつも、感覚的には反発したくなります。しかし茶道において岡倉天心を論じてきた先行研究の延長線上には、おのずから文化ナショナリズムとしての茶道の理解が存在すると考えるべきでしょう。本書を翻訳しながら実感したことですが、海外において刊行されている茶道研究書はかなりの量と範囲におよんでいる現実があります。さらに原著は英語圏において茶道に興味がある人々によって読まれ、〝茶道とは文化ナショナリズムである〟という認識を広める結果になることでしょう。

私自身は、そもそも茶道の実技に基づかない岡倉天心をもって茶道を論じることは観念的に過ぎると批判的に感じてきました。しかし多くの研究者が岡倉天心の言説を論じてきた研究の蓄積があり、本書のような研究が英語圏で評価されている以上、これはもはや引き返せない地点を越えているといえます。本書の内容に問題があると考えるならば、〝本書〟を黙殺するのではなく、〝原著〟に反論すべきなのです。いまや日本人なら容易に理解できる国内向けの言説のみを対象にしていては、少なくとも茶道研究として不十分ではないかと思います。

従来から茶道という存在は、〝不立文字〟、〝一筆もなし〟などと称して言説化を拒否してきました。

茶道とは何かを定義するとして、歴史を通じてつじつまが合うように説明することはいまだにむずかしいでしょう。おそらく、研究者が岡倉天心に引き付けられるのは、まさに岡倉天心が茶道を魅力的に言説化している稀な事例であるからではないかと私は思っております。

本書において私がもっとも問題を感じているところは、昭和戦前期において家元が果たした役割を、ある意味不適切に過大評価しすぎている部分です。この時期のナショナリズムの高揚に、家元が積極的な役割を果たしたといえるのでしょうか。知識人が先導した議論に、家元が責任を負わなければならないのでしょうか。茶道がナショナリズムの高揚に利用されたことは否定できませんが、ある程度の規模に成長した茶道を、為政者が巧妙に利用したものと私は考えます。拙著九六頁においてこの点を「流派発展のために地道な努力をつづけていた家元は、みずからの実力を十分認識しないまま、結果として国策への協力をしていくこととなる」と、私は評価しました。

ここに着目すれば、家元の果した役割に関して、逆に本書を積極的に評価すべき部分も導き出されます。近代の数寄者のような道具への執着による茶道では、広がりに限界があります。知識人が生み出した言説も、それが一般の茶道愛好者に直接広まるためには、家元というチャンネルを通す必要があるといえます。昭和戦後期に〝日本らしさ〟の象徴としての茶道を広めたのは、ひとえに裏千家の功績といっても過言ではありません。ここに史上はじめて日本人は茶道を共有することが可能となりました。その過程を本書は詳細に物語っているといえるのです。

茶道を学んできた経験から、裏千家流の考え方には異なるものがあるように感じることがあります。この私の印象は昭和戦後期以降の裏千家の展開の中で生み出されてきた〝新たな〟茶道の考え方によるものと推測します。茶道の世界が今後その方向に収斂することは自然な成り行きでしょう。もはやそれが茶道の――ナショナルであり、グローバルな――スタンダードであるといえます。ちょうど裏千家がはじめた「花びら餅」を、いまや多くの日本人は正月を象徴する和菓子と考えていることがその良い例です。

日本人にとって茶道の存在はあまりにも当たり前です。そして現在見られる茶道のあり方が過去から変化なくつづいているように考えています。千利休が大成したとされる点前が後世に変化したことを研究テーマとしてきた私は、これが必ずしも事実ではないと申し上げることができます。このようにあまりにも当たり前と考えられていることを研究するためには、かえって外からの目が有意義であるように思えます。

しかしここで井の中の蛙的な発想をしなくてもよいのかもしれません。著者は本書第五章においてヨーロッパ各地やインドに目を向けています。外国に目を向けてみるならば、世界の各地にさまざまな喫茶文化が伝わっています。そして日本の周辺の国々において〝伝統的〟と称される喫茶文化が、文化ナショナリズムの土壌から新たに生まれ育っている現象が見られます。それらに対して、日本の茶道は変化をともないながらも、途絶えることなく現在まで着実に伝えられてきました。たとえ〝文化ナショナリズムとしての茶道〟を前提にしたとしても、日本の茶道が長い歴史をもち、そして豊かな存在であることは、本書から容易に読みとることができるでしょう。

以上のように本書には問題なきにしもあらずといわざるを得ませんが、一方で素直に傾聴すべき点もあります。また読み方をかえるならば、より広い視野から茶道の意義を見直す契機になると思います。いわくいいがたい〝茶道〟という巨象を外国人が撫でるならば、本書のような見方もできるのかと受け止めていただけますことを念じます。このような包容力が茶道を今日まで守り育て、今後も伝えていくことになるのでしょう。

最後になりましたが、本書の内容等に関してお教えを乞うた多くの茶道愛好者および研究者の方々に、ぶしつけな質問をしましたことをお詫びしつつ、おかげさまで本書が完成しましたことを報告して、御礼にかえさせていただきます。

エムティエムジェイ
MTMJ
日本らしさと茶道

2018年4月10日　第一刷発行

著　者……クリステン・スーラック
監　訳……廣田吉崇
翻　訳……井上　治　黒河星子
発行所……さいはて社
ホームページ　http://saihatesha.com/
メールアドレス　info@saihatesha.com
電話　050-1481-9406
ファクシミリ　020-4668-7526
発行者……大隅直人　正岡加代子
装　幀……上野かおる（鷺草デザイン事務所）
組　版……田中　聡（TSスタジオ）
校　正……大林和子　坂井康史
写真協力……公益財団法人 松殿山荘茶道会
写真提供……とみうらたかのり（STUDIO BUG）
印　刷……共同印刷工業
製　本……藤沢製本
協　力……清田一真

Copyright © 2018 by HIROTA Yoshitaka, INOUE Osamu, KUROKAWA Seiko
Printed in Japan
ISBN 978-4-9909566-1-5

［著作者略歴］

◆著者◆

クリステン・スーラック
(Kristin SURAK)

1976年生まれ。カリフォルニア大学ロサンゼルス校（UCLA）大学院修了、Ph.D.（Sociology）。ロンドン大学東洋アフリカ研究学院准教授。専門分野は国際人口移動、ナショナリズムなど。本書の原著により2014年のアメリカ社会学会アジア部門出版賞を受賞。裏千家流茶道を学び、宗清の茶号をもつ。

◆ 監訳 ◆

廣田吉崇
(ひろた よしたか)

1959年生まれ。東京大学法学部卒業、兵庫県職員（一般事務職）。松浦祥月氏および正親町松仙氏に鎮信流茶道を学ぶ。神戸大学大学院国際文化学研究科修了、博士（学術）。著書に『近現代における茶の湯家元の研究』（慧文社、2012年）、『お点前の研究―茶の湯44流派の比較と分析』（大隅書店、2015年）がある。

◆ 翻訳 ◆

井上　治
(いのうえ おさむ)

1976年生まれ。京都大学大学院文学研究科修了、博士（文学）。京都造形芸術大学准教授。著書に『花道の思想』（思文閣出版、2016年）、『歌・花・香と茶道』（淡交社、2017年）がある。

黒河星子
(くろかわ せいこ)

1981年生まれ。京都大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学。京都造形芸術大学非常勤講師。論文に「一九五〇年代の在日朝鮮人政策と北朝鮮帰還事業―帰国運動の展開過程を軸に」『史林』92(3)、2009年などがある。